

E. ナウマン著「日本列島とその住民」邦訳

山田直利¹⁾・矢島道子²⁾

1. 訳出にあたって

E. ナウマン(Edmund Heinrich Naumann: 1854 ~ 1927)は、1885年に日本政府との間の雇用契約が切れて地質調査所を退職し、7月にドイツに帰国した。同年9~10月にベルリンで開かれた第3回万国地質学会議での講演に先立って、10年間の日本滞在中の研究成果を総括して、「日本群島の構造と起源について」(Naumann, 1885a)を発表した。1886年に入ってから、2月9日ウィーン王立地理学協会、3月6日ドレスデン地学協会、4月3日ベルリン地学協会、4月28日ドイツ地理学者大会(ドレスデン)、5月27日ミュンヘン地理学協会、6月29日ミュンヘン人類学協会と、日本の地質・地理・歴史・風俗などについて精力的に講演して回った。また、上記のドレスデン地学協会での講演が発端となって、滞独中の森 林太郎(鷗外)とアルゲマイネ・ツァイトウング紙上で論争を交わしている(小堀, 1969)。

今回取り上げた論文は、上記のベルリン地学協会での講演“Die japanischen Inseln und ihre Bewohner”を同協会会報に印刷したものである(Naumann, 1886a)。本論文でナウマンは、日本列島の大地形・地質構造、日本の先住民、東京・大阪・高知の自然と慣習、中山道の旅、白根山の噴火活動、長野盆地、妙義山登山、気候の対立などについて、1年の季節の移り変わりに合わせて述べたのち、外国文明の受容、祖先崇拜の伝統などについて論じている。ナウマンは、本論文の前半部分では日本の風土の美しさ、民衆の素朴さなどを具体的な話題を挙げて語る一方、後半部分では、開国の動機が決して自発的なものではなく、多分に模倣的、急場しのぎであり、外国文明の導入に当たっては祖先崇拜の伝統を無視するわけには行かないと述べている。後者の論点は森 鷗外との論争にもつながるテーマであるといえよう。

私共は、ナウマンが日本滞在中に得た日本の国土と民族の全体像を知るためには、本論文のような広範なテーマを取り扱った文献も重要であると考え、今回本論文の全文翻訳を行うこととした。本論文はまた「フォッサマグナ」と

いう名称が初めて使われたという意味でも注目される。

本論文は全篇書き流しで、段落も少なく、大変読みづらい。邦訳に当たっては、段落を増やし、新たに小見出しを設け、訳者による補注を〔〕で示したほか、若干の訳注を設け、また関連する文献のリストも作成した。本論文には図表はないが、ナウマンが講演時に展示したという、ナウマンの日本旅行路線図(Naumann, 1887)を複製、加筆して補図1として載せた。白根山(草津白根火山)および長野盆地(善光寺地震)に関しては、故山下 昇氏によって邦訳された「日本の火山、白根と磐梯の蒸気噴火」および「日本における地震と火山噴火について」(いずれも山下訳, 1996 所載)を参考にした。また、本論文と類似の表題を持つ論文「日本列島の地と民」(Naumann, 1886b; 小堀訳, 1969)の訳文からも多くの示唆を受けた。

謝辞: 熊本大学文学部名誉教授上村直己氏からはドイツ語の翻訳に当たってご協力を頂いた。厚くお礼申し上げる。

2. E. ナウマン著「日本列島とその住民」邦訳

<はじめに>

6年前に本地理学協会の高い評価のある集会に参加して皆様の前でお話しする名誉を与えられたのは、当時すでに私の建議で始められていた日本の地理学的、地質学的調査の目的について述べることであった*¹⁾。つい先ごろまで私の指導下にあった調査事業がその目的の遂行にいかにか大きく成功しているかについて、今日皆様方に説明することは私の義務であるに違いない。だがしかし、私が10年間の日本滞在中に集めた見聞に基づいて日本の国土と民族の全体像を示すことも、皆様の希望によりよく叶えるものと信じている。このテーマはまた、1884年半ばまでに作成された地質調査所の地図が、すでに前年始めに和田氏(和田維四郎地質調査所長)によって皆様の観覧に供せられた*²⁾ときに、また昨年のごこベルリンの万国地質学会議の際にも同じものが展示されたときに、優先的に取り上げるに値するものであった。

1) 地質調査所(現産総研 地質調査総合センター)元所員

2) 日本大学文学部

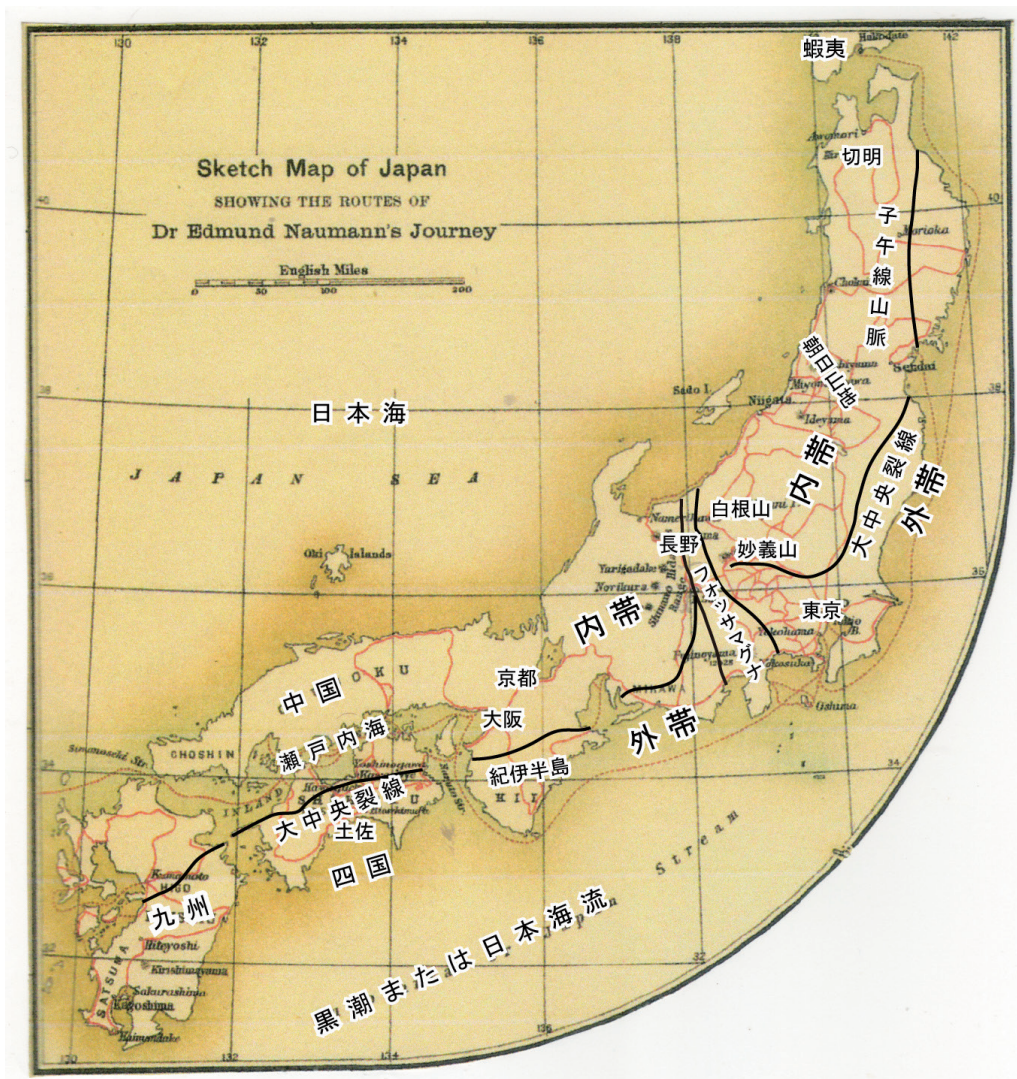
キーワード: ナウマン, 日本列島, フォッサマグナ, 四季, 東京, 大阪, 白根山, 長野盆地, 妙義山, 祖先崇拜

いま皆様の観覧に供している日本地図内の赤い線〔補図1参照〕は、私の旅行・調査ルート網を表わしている。それは総延長約 10,000 km に相当し、圧倒的に大部分は徒歩で踏破され、そして少なからざる部分で簡略化されている。この旅行は科学的観察と絶えず結び付いていた。

<日本列島の大地形>

政治的概念での日本は東アジアの3大花綵列島、すなわち、千島列島、樺太を除く日本列島および琉球列島を擁しているが、地理学的な意味における日本弧は、樺太・蝦夷・本州・四国・九州によって表される、半分は海の中に隠れている山脈の頂部と理解される。それは大アジア圏の一部を構成している。大アジア圏にはまたヒマラヤ山脈

やウラル山脈も属し、同圏は南東および西方に続いて、2つの広大な分枝、すなわちマレー諸島およびヨーロッパとしっかり結び付いている。日本列島は、深海底からそびえる巨大な山脈一わが地球で最も重要とされるもののひとつである—の海面上の部分にはほかならない。〔日本列島の〕最大の海拔高度は高さ 3,787 m *3 の有名な富士山から得られており、一方、近接する太平洋タスカローラ海淵〔千島海溝のほぼ中央部の深所〕では 8,360 m に達する深度が測量されている。太平洋の前面には日本弧が地表の巨大な扁平な高まりとして現れ、その高まりは大洋の深淵から 3° 以下の角度を持つ非常に平滑な斜面を経て列島の山勝ちな地域にまで達し、〔日本列島の〕他の側では日本海の 3,200 m の深さの海盆へと平らになって行く。



補図1 ナウマンの日本旅行路線図。Naumann (1887) の付図 (山下, 1996 の口絵 3) の挿入図を使用。ドイツ語の地名等を邦訳し、本論文で記載された地名・地帯名等を追記した。フォッサマグナおよび大中央裂線 (中央線) の分布は Naumann (1893b) の「日本群島の地質構造区分」図によった。原図で赤色の路線は本図では灰色の線で示されている。

<日本列島の地質構造>

浸食によって縦横に深く削られ、全体的に山勝ちで、鬱蒼たる植生におおわれた日本列島は、大部分、古い時代の、厚い褶曲体にまでなった地層群から構成される。すべての山脈は、一方〔南方〕の首都東京に近いところから他方〔北方〕に向かって伸びている巨大な横断割れ目によって2つの地区に分けられる。この割れ目、いわゆるフォッサマグナ*4からは多数の火山が成長しており、その中でも富士山は重要な役割を演じている。日本弧の高まりの頂点近くを通り、全島弧に沿って延びるきわめて重要な線〔中央線〕—非常に古い時代の大きな縦走断層を示すと思われる—によって、全山脈は、遮るもののない大洋に面する外側の地帯と、大陸側に位置する内側の地帯とに分割されている。この大規模な断層線は上記の横断割れ目（フォッサマグナ）によってその正常な経路からそらされ、その結果、フォッサマグナの周辺で大洋側により大きく開いた内側への屈曲を示している。

中央線の両側では地質構造のきわめて注目すべき対立がはっきりと示されており、この対立は地形にも見まがうことのない表現となって表れている。外側〔外帯〕には、深く^{かんにゆう}嵌入、蛇行した河川によって著しく削られた幅広い卓状の地形タイプ—わずかな山頂だけが一般水準上に突き出ている—と私が考える山地が発達している。この山地は古い時代の堆積岩から構成されている。縦走する中央線の内側〔内帯〕では火成岩体が地質構造に関与している。そしてなによりも四国と中国の間には長大な瀬戸内海の凹地が生じており、それから幅広い谷と谷底平野を特徴とする中国丘陵が続き、その北方の〔日本海〕海岸付近には鋸で細かくひかれたような山脈が伸びている。

フォッサマグナに近づくほど、山地はより高くなり、山脈は圧縮されて狭くなる。フォッサマグナの北方に位置する島弧地区では、とりわけ内帯側に子午線山脈〔奥羽脊梁山脈〕が分布する。同山脈は日本海に向かって多くの分枝を出し、そして多数の火山を載せている。火山は一般に内側の大陸側に位置する地域に限られ、それらは古い山塊の間に出現する円錐形の形によって地形に非常に強い影響を与えている。

<アイヌ>

緯度方向の広がりではほぼアレクサンドリア〔北緯30°〕とヴェネツィア〔北緯45°〕の間の差に相当する〔日本の〕4つの大きな島のうち、その最北の島、蝦夷は今日の講演では考察に入っていない。この乾燥地帯にごくわずかの人数で住んでいる民族は日本人とは根本的に異なっている。彼

らは髭の濃い、狩猟と漁労で生活しているアイヌ人であり、今日では蝦夷と若干の北方諸島にのみ生存しているにすぎないが、ずっと古い時代には最南端を含む全列島が彼ら自身のものであり、その後、戦闘に熟達したモンゴル—タタール種族が列島に侵入して抵抗には不向きな原住民を北方へ北方へと後退させた。

<日本の四季>

日本の風景は1年の季節に応じていつも違った衣をまとうっており、そして民衆の生活にもまた太陽の位置の〔違いの〕影響があることが知られている。私たちは以下に、この花綵列島がさまざま季節でいかに装うかを見るだろうし、少なくとも多くの地方では山の中にいる住民たちが、雪に埋もれて一種の冬眠状態を保った後、暖まり行く日光によっていかに新しい生活に目覚めて行くかを見て行くだろう。

<春>

私たちの国〔ドイツ〕と同様に、春は詩人たちが歌う美しい季節である。その時、たとえば無名の詩人は春の風を招きよせ、それでウグイスの凍った涙を溶かす。別の詩人は問う。雁は、花のない北の故郷がより美しく思われるので移り棲むということがあるだろうか。大洋に面して深く入り込んだ海岸地方では、5月始めにはすでにアンズの蕾が開く。もちろん、高い山々は同じ季節にはまだ厚い雪に埋もれている。暗緑色のツバキの杜からは赤い花が明るく咲き出し、白いモクレンが時々人目を引く木々を蔽い、5月にはツツジが咲き揃って盛観を呈し、そして同じ月に紀伊半島を旅する人はシャクナゲの森全体がアルプスシャクナゲ（アルペンローゼ）で溢れ返るのを見ることが出来る。しかし、春の最も美しい装いを見せるのはサクラであり、そして、4月末にサクラが満開となるときには、老いも若きも、貧しき人も富める人も、野外に出て、花の雨を楽しむ。上機嫌に笑い、さまざまな色に見える大人たちの姿は、東京の春の祭り以外ではほとんど見る事ができない。

<お花見>

都市〔東京〕の北部〔東部?〕では、金属で飾られたきらびやかな色彩の浅草五重塔が日の光に輝き、そこからは、低い弓状の木橋群の一番北の橋〔吾妻橋〕が幅広い隅田川の左岸へと通じている。サクラの季節—通常は4月末—には、人々の雑踏はこの橋を越えて、橋のすぐ近くから始まり、2 kmの長さで川沿いに北方へと続く桜並木の道

へ押し寄せる。幅広い堤の上の道にはあちこちで小さな茶店が見られる。自然や民族が祭りのときにははなやかであるように、この店は祭日の飾りを付けていた。色とりどりの提灯ちようちんが屋根から吊るされ、戸外には色とりどりの吹き流しが高くはためき、そして、家の中では赤い毛布の敷かれた畳に客が坐り、魚や卵などを酒で調味した祭り料理を前にしている。入り乱れて押し合う人々の集団の陽気な騒ぎに、三味線(日本のギター)をかき鳴らす音と女たちの歌うようなしゃべり声とが混ざり合う。白い花でおおわれた堤の下には、我が国のレストランに相当する大きな茶店があり、その中で人々は忙しく働き、そしてそこから少し離れて、川がゆっくりと流れ過ぎるところでは、旗を翻した大きなゴンドラがゆっくりと上流および下流へ滑るように進むのが見られる。ぎっしりと詰まった雑踏は並木道の終点に向かって個々の群れへと分かれて行く。ここでは、酔っぱらったしかめつらの人はグラグラになった足でも踊れるようなより広い場所を探さねばならない。

<江戸—東京>

東京は人口およそ90万人の都市である。それは江戸湾の北端に位置し、近くの関東山地から流れ出す比較的大きな川、隅田川が湾に注ぐところである。この川の西側には、およそ300年前に作られた、巨大な石垣、大きな堀および堅固な城門をもつ大規模な城〔江戸城〕がある。二重の輪になった堀および石垣の中央にはかつて御殿があったが、つい15年ほど前に火災で灰燼かいじんに帰している^{*5}。この都市は広大な面積を占め、パリとほとんど同じ広がりを持っているが、これは驚くには当たらない。なぜなら、ここでは各々の家屋はおおむね一家族のみが住み、城の石垣の内側には建物のない広い土地があり、外側の市区には茶とクワの栽培地のかなり広い区域が占めているから。寺の土地およびとくにいわゆる屋敷もまたかなり大きな場所を占めている。屋敷とは、生垣あるいは石堀で囲まれた住宅および館の集まりのことであるが、それは1868年まで、すなわち封建支配・封建制度の崩壊のときまで、誰かの大名、領主およびその家来たちの家族の住居として使われていた。これらの古い諸侯の邸宅の多くは破壊され、あるいは改築されている。高い地点から都市の光景を眺めることができれば、なかでも高く聳える寺の屋根が目を引き、多くの場所では小さな木造家屋の間から灌木や樹木が姿を見せ、そして灌木の茂ったいくつかの幅広い丘陵地が広大な家並みの間に島のように突き出ている。丘陵地は都市の西部および北部で終わっており、低い地形の高原が緩やかな高まりの地形および段丘状の隆起を経てはるか山地〔関東

山地〕の麓まで続く。

<火事場>

火事の警鐘が鳴ると〔東京の〕街全体が言葉では言い表わせないような興奮状態に陥る。消防隊の一团は、垂れ下がる紙の房〔馬簾ばれん〕を備え長い棹さおに固定された纏まといを担ぐ人を先頭にして、まるで荒々しい狩獵者のように、我々のそばを通り過ぎて別のところへ疾走する。すべての人々は、黒い煙雲あるいは明るい火の光が火事場を示している方向に向かって走り、群がる。人々は災難の場所に近づくほど、その行動は落ち着かず狼狽したものとなる。叫び声と喧騒のなかで、人々の群れは畳、鞆および日本の家庭のありとあらゆる家具を積み込んで我々にぶつかって来る。火事場に着くと、燃え上がる炎のすぐそばで、消防隊がすでに火を被った屋根の上に彼らの纏を立てるのが見られるが、敬虔な迷信によればそれによって火炎の前進を阻止できるだろうと思われたにちがいない。人々は愚かにも決死の覚悟で競い合う。私は、屋根の上に約20人の人が乗った二階建の家が、火災によって一階の部分が焼かれて、悲鳴と喧騒の中で崩壊する様子を見た。大火災によって多勢りきせいが罹災し、そして強風が吹き荒れていたので、街の多くの部分が灰燼に帰した。消防隊は大工や建築職人〔鳶〕の組合から構成される。〔消防の〕仕事がないとき、彼らは街のあれこれの部分が火災で焼失することを常に気に掛けている。一そのため多くの富裕な商人たちは、大火事の際に家・屋敷を守るため救いの悪魔〔火消たち〕に高いお金を約束せねばならない。少し前まではとくに東京の住民たちはこのような厄介事に耐えねばならず、それは今日でもなおある程度までは日常茶飯事である。

<建築材料>

建築材料としてもっぱら木材が利用されていることは、国民の発展において障害とされるに違いない。東京では通常の住宅の寿命は平均的に30年より長くはないと言われている。ドイツでは前の世代の仕事は次の世代にも役立つが、日本ではそうではない。ここでは、すべてが速く移ろいやすいという性質を持っている。火災は人々が苦勞して作ったものをあまりにも速く破壊する。したがって、より永続性のある材料を導入することは最も重要な改革の一つであろうし、そして、日本における石炭と鉄に関する詳細な報告〔ナウマン、1883〕の中で、莫大な鉄鉱石埋蔵量—完全に無視された—のように非常にすぐれた資料の利用と結びつけて、建築材料としての鉄の一般的利用を促進することを、私はすでに数年前に政府に提言した。

<土佐の山と海>

この国〔日本〕では、人々は山巔〔^{さんてん}尖った山頂〕のこここで春を祝う。四国の土佐でも同様である。この島〔四国〕の南側の半円形の開口部の真ん中では、灌木の生い茂る丘陵によって囲まれた湾〔土佐湾〕が陸地に深く入り込んでいる。それは山脈の間に長く延びた、高知の最も外側の豊かな盆地に続く。上記の湾によって切断された山脈の頂上からは、北方に低く分布する平坦地とその前後に階段状に高まる低山脈の魅力的な美しい眺望を楽しむことができる。平野の中央には、いわゆる鏡川^{*6}によって縁取られた人口40,000人の首府高知が広く分布しており、その中央には森で覆われた、古い大名の城の遺跡を持つ丘陵がある。午後には〔潮が満ちて〕海が広がる；南東方では、遠くには続かない白っぽい地帯—そこでは遠浅の海岸が波で泡立っている—が現れ、一方、西方および南西方では山の支脈が荒々しく砕け散る波を押し返す。山巔のうちの最高の山稜である台ヶ森^{*7}は、いたるところが有名な眺望地点であり、この山巔の名声は非常に大きいので、春には陽気な仲間たちが立ち寄り、いくらか愛嬌のある娘たちに侍られて酒を飲みながら眺望を楽しむ。それから、この機会にと甘いワイン〔酒〕に酔っぱらった多くの威厳ある市民たちが、帰途には彼の仲間うちの笑い声とともに急な小道を少しだけ転がるように下りて行く。

<鯉のぼり>

5月始め、街や田舎では、多くの住宅や農家の上に風を孕んで浮き沈む鯉のぼりが泳いでいるのが見られる。この模造の魚は前年に男児の誕生があったことを知らせている。〔ただし〕家に双子が授かったからといって2匹の鯉を求めたならば、それは間違いであろう。日本人はこのような贈り物〔双子の誕生〕を運命のいたずらと見ており、多くの人々と同様に我が身のこととして考える：突然多くの子供に恵まれるよりも、順々に生まれる方が好ましいと。夫から双子を授かった主婦は正直言って恥ずかしい；なぜなら、彼女は不謹慎なことをしたと信じているから。迷信的な父母は、臆病な心遣いで、鏡の中に子供を見ることを妨げようとする。なぜなら、彼らはかつての青年時代の眼差しを鏡の中に見ることになるので、双子の誕生の原因は男盛りのためであると思込んでいるから。

<5月～6月>

5月末には温暖な季節が始まる。カシワやクスノキのような常緑樹は新しい衣を着ける。ノスリ的一种であるトンビは、冬や前年には空高く低音で震えるような鳴き声に

よって海岸地方で人目につくようになり、厚顔で図々しいカラスと争って、雪を被って綺麗になった山岳への新婚旅行に旅立ち、自慢の親戚であるハヤブサやワシのいる近くで蜜月を過ごすことになる。茂みからはコオロギやセミの耳を引き裂くような鳴き声が響き、そして暖かい地方の疫病神である蚊が現れる。

6月始めには雨期が始まる。大気の湿度が高いため蒸し暑い季節となり、そして1年で最も重苦しい4週間が始まる。この季節には、10月末に種を蒔いた冬の作物、コムギ・オオムギ・ナタネが収穫され、同じ畑には水が引かれて、そこにイネの苗が植えられる。雨期が過ぎると、太陽が焼け付くような光を放って燃える。名高いフジ(ヴィステリア)の淡青色の、ブドウの房のような花の穂はすでに盛りを過ぎ、クグイ(鶺鴒)は元気に歩き回り、溝や沼にはバラ色の大きなハスの花—日本人によってしばしば現世の泥沼から立ち上がる心の清らかさのたとえとして用いられる—が漂う。稲田ではカエルが鳴き、そして富士山では〔雪の〕白い冠が溶け落ち、裸になった山頂が山や谷に君臨する。—いまや巡礼が始まり、敬虔な男たちの群れが埃だらけの街道を聖なる山に向かって歩いて行く。

<京都・大阪>

森林でおおわれた山脈に囲まれた豊かな盆地〔京都盆地〕—そこから主島〔本州〕の広い西部地区が始まる—には、多数の寺院を伴った古き首都、京都あるいは西京がある。多数の弓状の木橋の掛かった、夏季には半分は干上がる川〔鴨川〕が、街の東部で、非常に規則的に作られた街を取り巻くように流れる。夏の夜には生を享受する住民たちがこの河床に押しかけ、昼の灼熱の後に訪れた夜の爽快さを楽しむ。小さな板張りの座敷の上、色とりどりの提灯の下でお喋りし、戯れ、そして酒を飲む。

夏の間、多数の元気な人たちが隣の、淀川の三角州に作られた大阪に向かう。国内商業にとって最も重要で、かつ日本で最も豊かな街、大阪の河川や運河は夜間までゴンドラが運行される。芸者、お転婆娘—日本人たちによってそう呼ばれている—から甘い蜜を与えられた裕福な商人、たいして辛くもなかった週の週末に楽しい宴を祝って金を浪費する東京の官吏、家にいる妻がいくらか年老いたので多分初めて大都市を訪れる好色な農民—彼らは皆、人はトウガラシ粉に対するのと同様に美しき女たちには気を付けねばならないというよき教えを気にも留めない。揺れる小舟の上で踊る提灯はひとり岸辺にたたずむ人に、大阪は享樂の都であると語る。しかし、富める者のすぐそばには貧しき者がおり、栄光のかたわらに

は不幸が宿る。貧しい親は仲介人を介してその娘を娼家に売り、あるいは舞妓として貸し出す。大阪は国の多くの部分、特に国の南部に商品を供給する。非常に率直な方法で仕事は営まれ、下層階級では児童が生まれるとはっきり言って不幸だとされる。大阪の女性はどこか特別な美人という評判を喜ぶ。彼女らはすらりとした体付きで、その白い顔色は非常に優れた性質と見なされている。

<中山道>

すでに見たように、京都や大阪では暑い季節でもかなり活気があるが、東京は7月から8月にかけて静かになる。指導的立場にある官吏たちは、どこか山の中の温泉場へ引き込んでしまうからである。私は、1882年7月に、どこよりも有名な草津の硫黄泉とその近くに位置する白根火山を訪ねるための旅に同伴するよう彼らを誘った。すぐ前に始まった白根山の噴火の知らせはこの旅行に対する特別な動機となった。

東京での調査業務の処理のため私は多くの夜を眠らずに過ごしていた。そのため私は疲れ切った朝の2時には、当時まだ〔東京から〕約110 km北西の高崎への交通に使われていた粗末な日本の乗合馬車の腰掛の隅で過ごしていた。今では便利になり、鉄道が高崎よりも少し先まで通じている*8。一行には御者やおさだまりの馬丁が含まれていて、彼らは大声を上げたり肘を突ついたりして人々を道路から立ち退かせる。我々のでこぼこ道の馬車旅行は、非常に重要ではあるが穴だらけの街道、東京から山勝ちの内陸部を通過して京都にいたる中山道を通っている。このみじめな乗り物は、浅瀬を越えるときにいつもがらりと音を立てて高く跳び上がる。馬車の座席の下は工具、釘、^{かすがい}錠などで充たされており、馬丁は突ったり叫んだりぶつかったりするだけでなく、釘を打ったり修繕したりもすることも心得ているので、誰も車が壊れる危険に関してとくに心配していない。我々は、そのように大変みじめな状態にあっても、昇る太陽に照らされた東京平野〔関東平野〕をできるだけはっきりと眺めるための苦勞をいとわない。ここ〔中山道沿い〕は他のどこよりも密に人口が密集している。もちろん人口稠密な集落は、人口に応じて期待されるよりもまだらに分布している。しかし、我が国〔ドイツ〕の村に似たどんな集落も、そして独立した屋敷も、まったく見ることはできない。

日本語の「^{むら}村」は普通“Dorf”と訳されているが、この名称は全く適切ではない。村は土地の平らな部分を意味し、^{こおり}郡あるいは地方の下位区分を意味している。主要な行政区分である県は地方を集めてできている。もし個々の集

落の名前を知ろうと思うならば、^{あざ}字すなわち小地方名によって訊ねなければならない。地図製作は、とくに小縮尺の地図の製作に関する場合は、このような著しく困難な状況が生まれる。村の境界は非常に大縮尺の地図においてのみ示されるので、大抵の場合、字の名前以外には何も利点はない。

主要な街道は、長い距離にわたって、多くの旅館や商店を含む密集した家並に沿って延びている。鉄道の設置によってこの街道交通の多くの部分は転業させられ、そして、以前はその収入をもっぱら旅人の財布から得ていた近所の商人や実業家は、これによって窮地に陥った。

農家の屋敷や村落はしばしば^{もや}霧のかかった竹林により取り囲まれている。高く盛られた土手によって正方形に区切られた沼のような稲田が大きく広がっている。濃い色の杉林があるところには、通常、寺が隠れている。大きな村落の近くではカボチャ、スイカおよびキウリが植えられている。養蚕業は平野の縁辺部で営まれる。平地には、コメのほかに、マメ、アイ、キビ、タバコ、ゴマ、ジャガイモ、オオムギおよびアサも植えられている。

<吾妻溪谷>

私が宿泊した三ノ倉〔現高崎市倉淵町三ノ倉〕では、住民が私に、私の旅の最も近い目的地である草津で大変な評判になっている二人の風変わりな湯治客、一人は黒人*9、一人は白人女性について語り、彼らは私の好奇心を大層刺激した。すでに道は三ノ倉の手前、神山〔原文ではKameyama〕で山岳地帯に入っている。第三紀の丘陵地からあちこちに急勾配でそそり立つ険阻な、森におおわれた火山岩錐が姿を現わし、あるいは高く尖った馬の背状の山稜および円いドームも出現する。この奇妙な山岳の形をなにかの支谷を通して下方から見るときには、非常に驚くべき姿がびっくりした目に映る。それは長く続くことはなく、我々はO型に開いた巨大火山の連年の大きな半円の中心にいる。南西方には煙を上げる浅間山の平べったい円錐丘があり、それから北西に向かって細長い岩尖として聳える四阿山〔原文ではAdzuma〕が続き、それから幅広いどっしりとした形の万座山が、そして最後に、我々の立っている場所の北西に、青緑色の山稜の上に乗った白根山が続き、その上には淡く白い蒸気の柱が青空に浮き出ている。我々がこれからその薄暗い岩石峡谷を下って行く^{あがつま}吾妻溪谷〔原文ではAdzumagawathal〕を通過して、100年前に浅間山から噴出した溶岩流が流れてきて、森の住民や村民を呑み込んだ*10。それは利根川まで、つまり噴火口から63 kmも遠くまで流れた。

<白根山>

標高 1,216 m にある硫黄泉，草津は広範な硫気孔群で取り囲まれている。ここに滞在していた湯治客の中に黒人がいることに私も気付いた。彼の妻である白人女性は山を越えて連れて来られたと、人々は私に教えてくれた。草津から白根山への道は、初め、谷によって深く刻まれた荒蕪こうぶの緩やかに高まって行く広い不毛の平地、いわゆる「原」〔谷沢原〕—この国にはしばしば見られる—の上を通る。それから、道はこの平地の中に聳える2つの山の間で二重谷に入り、そして2つの深い溪谷〔谷沢川と大沢川〕の間の狭い尾根の上を延びる道に続く。最後には、長大な壁のように見える円錐丘の麓にある小さな茶店に着く。標高 2,100 m の白根山の噴火口は北東—南西方向に相隔たって並ぶ3つの楕円形の〔火口〕群からなる。〔これらの噴火口を結ぶ〕窪地全体の総延長はおおよそ 2,000 フィートに達する。私の登山の時期には、中央の大きな釜である湯山〔湯釜〕が、大規模でかつ稀有な天然の光景の舞台であった。岩石質および泥質の壁に開いた大きな割れ目からシューシューとシャワーのように蒸気が噴出し雲が湧き上がる。釜の底にある湯気を立てているいくつかの池は湧き出し、あたかも水が沸騰したかのように滔々とうとうと湧出する。しかし、東側の切り立った壁の直下では、沸き立つ波は巨大な水柱となって立ち上がり、それから荒々しく泡立つ波としてあらゆる方向に飛散する。水柱が崩れ落ちると、その次には耳を聳する咆哮が高まって、激しく動く大波から再開された巨大な泉の上昇を知らせる。

わずか1、2週間前にはこの噴出する水柱の位置に穏やかな池があり、8月6日に烈しい雷鳴が周辺を恐怖に陥れるまでは、白根山の山頂では水蒸気の噴気自身がなにも見られなかった。爆裂に続いて石の霰あられと泥の雨が降った。石は円錐丘の表面に落下し、ここで地面に穴を穿った。しかし、泥の雨は5 km 遠くまで降った。信州から峠を越えてこちらへ来た旅行者はその雨を一杯に浴びた。噴出水柱の完全に垂直な側面が示すように、固まった泥や砂礫からなる円柱形の物体は、シャンペンの栓が空中に打ち出されたように、幾千の破片となって飛散するに違いない。8月9日には山の南西側に4つの大きな開口部が作られ、それから大量の熱水が流出した。10日まで噴火口は石を空中に放出していた。

人は滑りやすい割れ目の中を下降することによって約15分で沸騰する水面に近づくことができる。この割れ目の開口部で若干の水質検査および温度測定を行うために、私はずっと後ろや上にいる同伴者たちによってザイルに確保されて作業した。水質検査の採水には成功したが、最高

温度計は目に見えない岩の尖端せんたんにぶつかって粉々になった。細かい岩石シルトのために乳のように濁った水を後日調べたところ、きわめて興味ある結果が得られた。すなわち、遊離塩酸がかなり著しい含有量：0.5 %以上の値で検出された。

水柱の中で沸騰する運動は高い温度に起因するのではなく、水柱の上昇は大きな力で噴出する水蒸気物質によって生じたように思われる。噴出は非常に短い間隔で周期的に行われ、そしてすべての光景は間欠泉の現象を想起させる。

見事に成層した粘土層はさまざまな断面を示し、そしてこれによって、大昔から記述されているものと似た噴出が中断を挟んで起きたことが証明された。最も新しい爆発によって、噴火口底は所々かなり厚い泥の皮殻によっておおわれている。私は運悪くすっかり軟らかくなった地点で粘質物質の中に沈み、その時私は足の裏で深部のより高い温度をはっきりと感知した。一人の日本人は、私よりも悪いことに、腰まで沈み、辛うじてふたたび引き出されて、難を逃れた。

<長野盆地>

白根山に接して薄暗い針葉樹林に広くおおわれた山稜が広がっている。信州〔長野県〕への道はこの山稜を越えて北方へ続く。峠〔渋峠〕を後にすると、小高い堤を持った平坦で青々とした〔長野〕盆地の彼方に、雲の中に聳える山々が姿を現わす。それは火山群〔妙高・黒姫・飯綱火山〕である；それらの山頂は日本の最高峰〔富士山〕の一部である〔とナウマンは認識している〕。

下方、盆地の縁に近く、森に蔽われた鞍部の中の山々の麓には、渋〔の集落〕がある。親切で清潔な茶店、浴場—その中では男女の子供たちが仲良く入り混じって温泉を給湯された浴槽を満員にしている—、商店、粗末な住宅および当地の端で愛の女神を奉じた何軒かの館〔売春宿〕もまた、石ころだらけの道を賑やかにしている。村の傍らには勢いのある溪流〔夜間瀬川〕がさらさらと音を立てて流れている。それが、きわめて堂々とした大河、千曲川に合流するまではもはや遠くない。村の通りに面した茶店のバルコニーに、白人の女性が赤いガウンで姿を見せる。おしゃべりな村民は、なぜ外国人であるアメリカ人女性が草津からここへ移って来たかを私に話してくれた。彼女は一人では来れず、すでに数か月前から内縁関係にあった日本人の田畑管理人と一緒に来た。硫黄成分には不足することのなかった温泉療養の代金を上海で支払う〔意味不明〕。

盆地の下のほうの土地は、40年前、その土地を襲った恐ろしい地震^{*11}の舞台であった。大きな山崩れが主流の

川〔犀川〕をせき止め、川〔の水位〕は高く上がり、最後には川は岩倉山^{*12}で決壊した。目撃者は決壊に関してこう語る：「私は妻女山^{さいじょさん}^{*13}の上に立っていたが、その時突然鈍いざわめきの音を聞いた。数分もしないうちに水は西へ反転し、そして大波のざわめきが次第に山々の中に消えて行った。霧の雲は谷から立ち昇らずに、北および東に向かって突進した；暴風は砂や砂利を吹き飛ばした。私には荒々しく解き放たれた自然の猛威が、10万頭の野生の馬が広場に突進したかのような、あるいは天地がひっくり返ったかのような印象を与えた。」

<妙義山>

1882年に私が辿った北方への縦断および横断旅行の調査ルートについてさらにお話しするには時間がない。それ故、東京への帰途に就くために、南方および南西方に目を転じたいと思う。その道は、幅広く人口も多い千曲川溪谷を上流へと導き、先に述べた火山の輪の外側を曲がり、まもなく我々は中山道に入り、浅間山の一部である「原」を通過して険しい小道を行き、最終的には有名な碓氷峠に立っており、ここから平野の奥にある長大な山腹を登ることになる。この峠からは、そして道の上からは、下って右方に奇抜で鋸の歯のような荒々しい山岳が目を驚かせ、一方、南の遠方には関東山地の大きく遠くまで続く緩い弓状の稜線が重なり合って聳えている。すぐ近くに突然現れた、不思議な形の、空高く聳える岩柱および岩尖の群は妙義山の一部であり、それは古い火山の残存骨格というにふさわしい。一般に断崖には焼き焦げた岩片が卓越し、それを足掛かりとして、到達することの困難な山頂の登山—私は2年前に友人と一緒に果たした—を可能にしている。高さ1,100mの山頂に到達する前には、約25フィートの長さの垂直の裂け目を通して無理やり登らねばならない。下方への登攀は〔通常の〕登山よりも危険である。私は、滑落の危険があるために、人跡未踏の急勾配の岩肌の上から、身の毛もよだつ懸崖の角に突然現れた灌木の張った根に向かって元気よく跳躍したときのことを思い出す。我々が幸運にもふたたび下におり、夜茶店でだぶだぶの綿布団にくるまって寝ていたときに、山歩きの危険についての夢を見た。私はふたたび深く下へ延びる岩壁の縁で足を滑らしていた—そして眠りから覚めた。似たような状況は、一人の友人〔ミルンかもしれない〕が私に打ち明けたように、危険が一杯の氷河旅行のときにも生ずるに違いない。

妙義山は東京から楽に行くことができる。この廃墟のような山岳からわずか1時間しか離れていない松井田まで、〔東京から〕鉄道が通じている。

<秋>

9月は台風の日である。この破壊的な渦巻きの嵐は信じられない力を持って襲ってくる。2年前、私は神戸への帰途、瀬戸内海を通過する旅行の終りに、貧弱な日本の汽船の船上でこのような台風を深く知るようになる機会を持った。我々がそのとき波の餌食にならなかったことは、私には今日でもなお不思議でならない。

1880年8月の大型台風は琉球列島で成長し、そして8月24日から27日まで花綵列島上の経路に沿ってカムチャッカ半島にまで進んだ。9月と比べて10月に台風が来ることはほとんどない。晴れ渡った空はいま〔10月には〕、冬に備えている光景を嘲笑するかのようである。春に花々が満開になると同じように、秋にはさまざまな色に染められた森の紅葉がとても魅惑的である。我がアノン〔作者不明〕は歌の中で〔北の国から〕帰って来る初雁を歓迎し^{*14}、そして朝康は秋の宝石といわれる銀光色の露滴を歌う^{*15}。

10月末にはすでに最も高く最も北方の山々は白い冬の衣に包まれる。私は旅の途中でしばしば初雪に遭い、山地の高いところから低いところへ追い帰された。北方の多くの村々は25フィートにも達する雪をまとい、日本の山地における冬の生活は、家屋の構造が貧弱で暖房設備が完全に不足しているため、全く好ましくないとされる。農民は一日中蓋のない炉〔囲炉裏〕のそばに座っている。本州最北の村、切明^{きりあけ}^{*16}では人々は温泉で満たされた浴槽の中で一日中時を過ごす。住宅が日本人の考えにいくらかよく適応しているとすれば、部屋の中で、いわゆる炬燵はたしかに欠くことが出来ない。この設備は部屋の中央に取り入れられており、凹みは木炭で充たされ、その上には綿入れの布団で覆われた檜がある。冷えた人はただ檜の前に座れば、足は凹みに入り、手と下半身は布団の下で曲げられ、その結果人は自然と何かをすることから免れる。冬のさなかに山岳を歩き回することは危険であり、しばしば不可能である。しかし、寒い季節の最後の月である3月と4月、そして5月でさえも、雪は夜間の寒さにより表面が硬くなるので、特に北日本では強靱な農民たちは藁沓^{わらぐつ}を履いて行く。人々はシカ、イノシシ、カモシカ、クマを狩る。朝日山地では農民たちはしばしば彼らの住居から遠く離れて、山深くクマの後を追う。彼らは夜、火で溶かして雪中に穴を掘り、その小さな穴倉のような洞窟〔雪洞〕で眠る。

<年末>

年末になると、日本の街は非常に慌ただしくなる。借金はすべて返さなければならない。借金を返済する金がない人は、新しく金を手に入れるか、あるいは彼が金以外のもの

のを持って質屋を回ることになる。住民のうち多数の持たざる階層では、ずっと前から、質入れはきわめて当たり前のことである。私は、一人の男が彼の妻を、もちろん質屋業の施設ではなく、彼らがほとんど想像もできないようなところで質に入れた場合を知っている。元旦には祝賀の飾りが家々に置かれ、そして各人は、新年の祝詞をもって挨拶するために、知人および友人、親戚および上役のもとを回る。

<気候の対立>

1883年に、和歌山(紀伊半島)の多数の气象台で観測された最高気温が36.6℃になり、一方札幌(蝦夷)では最低気温が-22.2℃に達したことから、これまでの記述および観察に、何が第一に気温状態に関係するかということ、私はさらに補足しなければならない。この数字はすでに気候の際立った対立を示唆している。非常に著しい気候の相違は、1) この島国が北から南へ、つまり地理学的緯度に従って、長く伸びている結果、2) 国土の山勝ちな特性—高地と低地〔の併存〕—の結果、および3) 全山地の特有の位置—大陸側に向いているか、大洋側に向いているか—に従って示されている。最後の点に関しては、私は、北方山地の日本海側の地区が10月の終わり頃には厚い霧に覆われ、またしばしば雪に覆われるが、一方、東京の方では、緑したたる光景がきわめて明るい日差しを享受しているということを描きたい。最南端では気候は列島のそれ以外の部分ほど湿潤ではないが、気温状態に関しては、南イタリアに比較される〔ほど暖かい〕。蝦夷は寒冷で、非常に寒冷なために、きわめてまばらにしか住んでいない日本の移民が寒さを嘆いている。いずれにせよここでは〔厳しい〕気候のために日本で一般に使用されるものとは異なる生活設備が必要となっている。

<先住民族>

自然美がきわめて豊かな地方で文化と歴史を通して演じられる民衆生活の明るい姿は、非常に深い背景を持っている。最初の征服者が朝鮮海峡を越えてこの島国に入って来てから、2,400年が経過したと考えられる。全国に広がったアイヌ人の名前や貝塚^{*17}によって、髭の濃い原住民が海や森で獲物を求めていた時代をいまでも思い起こすことができる。歴史的事件の記録は、〔日本では〕我々の年代学でいう8世紀になってから始められた〔古事記のこと〕。南日本の古墳、その中に壺、刀および装飾品が見出される石室を持った大きな盛り土に関して、自然の丘のように大きな、この興味ある墓碑のいくつかが帝国の支配者に墓とし

て役立つであろうということはよく知られているが、不思議にも〔具体的な〕歴史はなにも教えてくれない。四国の高知の盆地で私はこの種のドルメン〔古墳〕を数百個発見した。豊かな遺産には、そのような埋葬様式がかつて慣習であったということを示すいかなる文字も書かれていない。

<外国文明の受容>

3世紀にはすでに大陸との知的交流が始まった。この島国には孔子の教えの星が空に上っている。しかし、その3世紀後に初めて仏教が〔人々の〕意識や心情を捉え、そして中国文明が嵐のように島国へ流れ込んだ。憲法、年代学、学術および工芸、なかでも中国の言語と文学が、すべての外国人を気軽に受け入れる島民に受容された。宮中では中国の模範に従って徐々に煩雑な儀式が発達した；奢侈と利己心が幅を利かせ、そして宮中の陰謀劇から血生臭い家門抗争が展開し、それは頼朝の軍事帝王、将軍への昇格をもって終わる。内外の敵に対する激烈な戦いの中で、将軍および封建制度は益々広い基盤を確保し、一方先祖伝来の天皇の権威は色あせる。17世紀までに及ぶ、日本人の性格に固有の男性の美德—今日の平和的時代には現れることのない—：勇気と死の軽視を我々に教えてくれたのは、日本の歴史のとくにこの部分である。日本のことわざでは「最もよく戦う者は死なない」と言っている。他のことわざでは「戦いは恐怖だが、男には危険はない」と言い、そして、逃亡者について「お尻に帆懸け」と言うときには、民衆は口を揃えて辛辣な嘲笑と巧みなユーモアをもって彼らを非難する。お尻は後ろを意味し、「に」は in, an, auf と、「帆」は Segel と、「懸け」は aufpflanzen と同じである。

事態の経過について詳しく知らない人は、ヨーロッパ文明への接触が自発的に行われたことをひたすら喜んで認め、それ故に日本人が最高の尊敬を受けるに値すると信じている。しかし、西欧の文明諸国民との自由な交流を始めた功績は日本の側にはなく、そして、日本人が我々の尊敬および好意に値するとすれば、我々は彼らの伝統に対して、しばしば過大評価されただけにすぎない改革と同じように多く〔の尊敬〕を与えるべきであろう。国民は、新しい原理の受容および消化を強めるためでは決してなく、内戦によって弱体化したために、1854年以前には閉ざされていた門が開かれたのである。すべての日本文化は非常に古く、かつ尊敬するべきであり、新時代の改革の努力は多くの点において非常に混乱し、急場しのぎのものである。

日本人は、改革への努力にあたって、彼らの古い地位に

新しきものを植えるために、すなわち、古い、深く根付いている、疑いなくきわめて健全なものの代わりに、適当な枝を接木するために、太古からの発展の構造を根絶やしにすることを欲しているようである。ある民族の道德の力はその固有の歴史に懸かっており、そして日本人は彼らの過去を恥じる必要は全くない。今日、東アジア人は無数の鎖によって過去に強く結びつけられている。祖先崇拜は特別な意味で道德の力である。祖先崇拜は日本国の歴史より古く、日本民族より古くからあり、途切れることのない勝利の歴史をもつ仏教も1,000年以上にわたる長い権力闘争の中でそれを廃することはできなかつたし、そして中国では祖先崇拜は、16世紀初め以来倦むことなく営まれたキリスト教の布教活動を頓挫させた障害であった。

<弘法大師とリッチ>

この問題に対して特別な関係のある者として、東アジアの宗教史における2人の高位の人物、すなわち、仏教の僧である弘法大師とドイツ人(?)イエズス会員リッチ*¹⁸がいる。

前者〔弘法大師〕は、我々の年代学では9世紀に、日本の祖先崇拜である神道あるいは神への道を仏陀信仰と和解させたのであり、そのとき彼は2つの教えを融合させ、神道の神々を仏教の神格の日本的現象形態として説明したのであった。日本人はこのとき全く外面的に仏教徒になったのであり、彼らは内心では彼らの祖先の信仰のままにとどまり、そしてこれ自身に忠実であった。

聡明で世渡り上手なりッチは中国で、日本の弘法大師と似たような行動をとった。彼は1582年に広東に現われた。彼はこの地に長年滞在した後、祖先崇拜と国家制度および世俗的道德律としての儒教はキリスト教と非常によく調和しうるものであろうと説明した。ドミニコ会修道士が〔リッチに〕嫉妬して、民族交流の呪いでもあった終わりなき不幸な布教競争を引き起こさなかつたならば、当時キリスト教にとって西と東の間を強い帯で結び付けることにおそらく成功したであろう。

<祖先崇拜>

中国および日本の祖先崇拜、すなわちすべての東アジアに一般的な文化活動は、その優れた中国流の教え一人々は罰を恐れることなく、賞讃を望むことなく、彼ら自身が美德を愛するために、いかによく生きるかの教え—を通じて新しい活気を受け取る。孔子は人々の関係について5つの普遍的義務を設けている：1. 君主と臣下の間、2. 親子の間、3. 夫婦の間、4. 兄弟姉妹の間、および5.

友人の間。(人への)畏敬という根本的な規範をもつ孔子の教えは日本人の血となり肉となっており、それに対して大將軍、家康は、彼の法律*¹⁹の作成に際して中国方式を見本に選ぶことによって少なからず寄与した。昔からの道德哲学の規範はいまでもなお厳しく守られており、そしてそれを信じる者は日本人の道德ではごく普通である。何故なら彼らは貞潔さをほとんど知らないか、あるいは若干の裕福な男たち自身は多くの妾—大きな間違いであるけれど—を持つから。この民族は道德的に決して低い段階にはない。その上、親と子の間の絆は我々の場合よりも緊密である。親への孝行は最高の義務である。父あるいは母に対して捧げられる彼ら独特の生命より美しいものは存在しない。各個人はこのように固い絆で過去に縛りつけられている；すべては昔に立ち帰り、そして今日の道德の状態は深く、計り知れないほど深く歴史に根付いている。

我々固有の文化の状況を考えてみるならば、その違いがいかに根本的であるかが示される。我々の場合はすべてが未来に向けられている。子供が彼の命を母の命に捧げるために存在しているということは、ほとんど考えられないだろう；しかし、母が子供を助けるために自ら進んで死に赴くときには、それは普遍的に認められた崇高な行為に値する。自己の幸福は子供の幸福のなかで頂点に達する。親は子供のために存在するが、子供は親のために存在するのではない。そこでは新しい家族が絶えず作られ、それは親の家庭から離れて新しい〔家族の〕中心になる。発展は進歩的なものである。これに対して、東アジアでは保守的な倫理が停滞の最も重要な原因の一つとなっている。

自然の絆によって示される人間同士の義務から、家族生活の原理から、国家的共同社会に関する義務が儒教を通して明らかになった。

すでに述べたように、家康は国に対する古い道德哲学の意味を非常によく認識していたし、そして彼のきわめて賞讃された法律を基礎として、それらを支配や秩序の確保のために用いた。

最も非利己的な子供の愛は、老人を神のように崇拜することと結び付いて、学問の発達を抑制し、つい最近まで多くの野蛮な習慣を内に保持していた。そして、国の体制が非常に長い間専制主義の束縛から立ち上がれなかつたのは盲目的な臣下の忠誠心のせいである。しかし、そのことを日本人はそんなにひどく嘆くべきだろうか？中国哲学の結実である祖先崇拜は社会の悪に対する傘であり防護服であったし、そして日本人がこの欠陥に悩んでいないのほうらやましがるだろう。

もちろん今日では多くの人々は変わったのであり、そし

て、引き続き社会的変化の中でますます激しくなる貧困の圧力が武器をしかるべく鍛造し、それが社会全体に刃を向けないとは誰にも分からない。

我々が見てきたように、仏教とキリスト教は、祖先崇拜と儒教が容易には無くならないという経験をすでに積んで来たのなら、それは恐らく現在でも簡単ではないだろう。そして、なぜこの原則は充たされないのであろうか？人がすべての旧来のもの、恐らく自分自身の皮膚を払い落とすための苦しみの中でわずかしか前へ進めないとしたら、人は様々な営み—それに流行の精神が残念ながらきわめて短い生命しか吹き込めなかった—に際してまた大真面目でかつより持続的に対処するしかないであろう。

訳注

- *1 ナウマンは1880年に地質調査所設立の準備のためにドイツに一時帰国し、そのときにベルリン地学協会（本論文ではベルリン地理学協会となっている）で「日本の経済状況と地質調査所」について講演している（Naumann, 1880；山田・矢島, 2016）。
- *2 和田維四郎は1885年2月のベルリン地学協会の例会に出席して、日本の地質調査所が作成した地図を展示し、併せて同地図の種類・内容と地質調査所の業務について短い講演を行っている（Güssfeldt, 1885）。
- *3 富士山の高さを示すこの値は、東京大学のお雇いアメリカ人教師W. S. チャプリンが三角測量法によって測定した値である（Naumann, 1885b；矢島・山田, 2013）。その後、参謀本部陸地測量部が1887年に3,778mと測定し、関東大地震後の1926年に3,776mと再測定して現在にいたっている（鈴木, 1993）。
- *4 ナウマンが本州中央部の「断裂地域の大溝」（Naumann, 1885a）を最初に「フォッサマグナ」と呼んだのは1886年2月のウィーン王立地理学会での講演であったが、その内容が印刷されたのは1887年になってからである（Naumann, 1887）。印刷物上で「フォッサマグナ」が最初に現れるのは本論文（Naumann, 1886a）である。
- *5 この火災は1873年（明治6年）5月5日の皇居火災を指す。
- *6 高知市北部の山地から発し、高知市の西部から同南部を流れて、浦戸湾で太平洋に注ぐ川。
- *7 原文ではDaiyamori。ナウマン著・山上訳（1890）では臺ヶ森。現在の高知市市街地南方の烏帽子山（標高359.1m）のことであろう（山下, 1996, p.289）。
- *8 日本鉄道会社による東京-高崎間の鉄道が開通したのは1884年5月、高崎-横川間が開通したのは1885年10月のことであり（老川, 2014）、ナウマンが1882年に白根山へ旅行したときには乗合馬車を利用するばかりはなかった。
- *9 原文では“Mohrin”（黒人女性）となっているが、これは前後の文脈からみて“Mohr”（黒人）の間違いであろう。
- *10 1783年（天明3年）の浅間山天明噴火による。吾妻渓谷にまで流下したのは溶岩流ではなく、鎌原火砕流にともなう岩屑なだれであった（荒牧・高橋, 1996）。
- *11 1847年5月8日（弘化4年3月24日）の善光寺地震、M7.4。家屋倒壊29,633戸、死者860人余を出し、犀川がせき止められ、決壊して大きな被害を生じた（藤井, 1996）。ナウマンは「日本における地震と火山噴火について」（Naumann, 1878）でこの大地震の被害を詳細に報告している。
- *12 長野市信更町安庭東方の無名の山（山下, 1996, p.87）。

- *13 原文では“Seidosan”。長野市松代町岩野にあり、川中島の戦で上杉謙信の軍が陣を張ったとされる小山。
- *14 源氏物語第12帖「須磨」に「初雁は恋しき人のつらなれや 旅の空飛ぶ声の悲しき」という歌が載っている。
- *15 百人一首に文屋朝康の「白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」の歌がある。
- *16 青森県平川市旧平賀村の切明温泉を指す。補図1にも載っており、ナウマンが1881年に東北地方の予察調査を行ったときに立ち寄ったところと思われる。
- *17 原文では“Kjökkenmöddinger”。デンマークのケッケンメッディングで初めて貝塚が発見されたので、これが貝塚を指す言葉となった。
- *18 Mateo Ricci (1552-1610)。イタリア人、イエズス会員、カトリック教会司祭。中国におけるキリスト教布教に成功し、明朝宮廷で活躍した。ナウマンはドイツ人としたが、これは間違いであろう。
- *19 1615年に発布された「武家諸法度」および「禁中並公家諸法度」を指す。

文 献

- 荒牧重雄・高橋正樹（1996）浅間火山。地学団体研究会編「新版地学事典」, 平凡社, p. 18.
- 藤井陽一郎（1996）善光寺地震。地学団体研究会編「新版地学事典」, 平凡社, p.700.
- Güssfeldt, P. (1885) Sitzungberichte der Gesellschaft für Erdkunde im Jahre 1885, Sitzung am 7. Februar. *Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, 1885, 93-95.
- 小堀桂一郎(1969) 「若き日の森鷗外」。東京大学出版会, 722p.
- Naumann, E. (1878) Über Erdbeben und Vulcanausbruch in Japan. *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und-Völkerkunde Ostasiens*, 2, 15, 163-216.
- 山下 昇訳（1996）日本における地震と火山噴火について。山下 昇訳「日本地質の探究—ナウマン論文集—」, 東京大学出版会, 23-89.
- Naumann, E. (1880) Ueber die wirthschaftlichen Verhältnisse Japans und die geologische Aufnahme des Landes. *Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, 7, 33-44. 山田直利・矢島道子(2016):E. ナウマン著「日本の経済状態と地質調査所について」邦訳。地学雑誌, 125, 257-267.
- ナウマン（1883）本邦産媒炭及鉄。地質調査所明治16年報, 2, 3-137.
- Naumann, E. (1885a) *Ueber den Bau und die Entstehung der japanischen Inseln. Begleitworte zu den von der geologischen Aufnahme von Japan für den internationalen Geologen-Congress in Berlin*

- bearbeiteten topographischen und geologischen Karten*. Berlin, R. Friedländer & Sohn, 91p. 山下昇訳 (1996) 日本群島の構造と起源について. 山下昇訳「日本地質の探究—ナウマン論文集—」, 東海大学出版会, 167-221.
- Naumann, E. (1885b) Notiz über die Höhe des Fujinoyama. *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur-und-Völkerkunde Ostasiens*, 4, 32, 104. 矢島道子・山田直利 (2013) E. ナウマン著「富士山の高さについての覚書」邦訳. 地学雑誌, 122, 535-538.
- Naumann, E. (1886a) Die japanischen Inseln und ihre Bewohner. *Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin*, 1886, 4, 204-221. (本論文)
- Naumann, E. (1886b) Land und Volk der Japanischen Inseln. *Allgemeine Zeitung*, No. 175, No. 178. 小堀桂一郎訳 (1969) 日本列島の地と民. 小堀桂一郎「若き日の森鷗外」, 東京大学出版会, 199-225.
- Naumann, E. (1887) The physical geography of Japan, with remarks on the people. *Proceedings of the Royal Geographical Society*, NS 9, No. 2, 86-102. 山下昇訳 (1996) 日本の自然地理および日本人についての短評. 山下昇訳「日本地質の探究—ナウマン論文集—」, 東海大学出版会, 261-275.
- ナウマン著, 山上萬次郎抄訳 (1890) 四国地質一斑. 地学雑誌, 18, 265-266, 357-362.
- Naumann, E. (1893a) Dampfausbrüche der japanischen Vulkane Shirane und Bandai. *Neue Beiträge zur Geologie und Geographie Japans, I, Ergänzungsheft No. 108 zu Petermanns Geographische Mitteilungen*, 1-15. 山下昇訳 (1996) 日本の火山, 白根と磐梯の蒸気噴火. 山下昇訳「日本地質の探究—ナウマン論文集—」, 東海大学出版会, 313-330.
- Naumann, E. (1893b) Die Fossa Magna. *Neue Beiträge zur Geologie und Geographie Japans, II, Ergänzungsheft No. 108 zu Petermanns Geographische Mitteilungen*, 16-36. 山下昇訳 (1996) フォッサマグナ. 同上, 331-354.
- 老川慶喜 (2014) 日本鉄道史 幕末・明治篇. 蒸気車模型から鉄道国有化まで. 中公新書, 227p.
- 鈴木弘道 (1993) 山の高さ. 日本測量協会, 276p.
- 山下昇訳 (1996) 「日本地質の探究—ナウマン論文集—」. 東海大学出版会, 403p.
-
- YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko (2016) Japanese translation of “Die japanischen Inseln und ihre Bewohner” (E. Naumann, 1886a)
-

(受付: 2016年1月13日)